

# 夢野久作「ドグラ・マグラ」論

## — 〈私〉とは何者か —

安部 美幸

○はじめに

夢野久作の書き下ろし長篇小説「ドグラ・マグラ」は昭和十年一月十五日に松柏館書店にて刊行され、今や日本三大奇書の一つとして名を連ねている。久作はこの作品の完成に二十年かけ、「五回読んだら五回共に読後の気持が変はることを請合ひます」「五回以上とは申しません。しかし五回だけでは必ずその読後感が変はつて行くことを絶対に保證します。」<sup>(1)</sup> という程の自信を持っていた。しかし、その内容は複雑で、大枠としては主人公〈私〉の一人称視点で書かれているが、途中で正木敬之教授が遺した阿呆陀羅經の文句や學術論文が挿入されるなど、幾重にも囲まれた入れ子型構造となっている。

この作品に初めて切り込んだのが鶴見俊輔氏であつ

た。鶴見氏は昭和三十七年『思想の科学』に掲載された「ドグラ・マグラの世界」において、「ドグラ・マグラ」は「自分をさがす探偵小説」であり「主人公のおかれた状況は、コミュニケーションの網目の発達した二十世紀で各個人が社会にしっかりとらえられている状況そのままである」と述べた。その後、「ドグラ・マグラ」は主人公〈私〉について<sup>(2)</sup>、複雑にねじ曲げられた時間、円環説など様々に論じられてきた。

今回、「ドグラ・マグラ」について考察したいのは主人公〈私〉についてである。「ドグラ・マグラ」の主人公は最後まで正体が明かされない。〈私〉とは一体何者なのか。〈私〉Ⅱ 〈眞一郎〉なのか。また作中に出てくる「ドグラ・マグラ」や死んだはずの正木博士の出現など、辻褃の合わない出来事に惑わされる。

本稿では今一度、「ドグラ・マグラ」と向き合って、「私」が目覚めたのはいつか」という問題を取り上げた後、「胎児の夢」脳髄は物を考えるところに非ず」という作中に出てくる二つの理論から、「私」とは何者かを突き止めたい。

### ○梗概

ブウウ——ンンン——ンンンン。という時計の音で目を覚ました〈私〉は自分がいつたいどこの誰なのかわからない。しばらく考えているうちに、隣から「……お兄さま。お兄さま、お兄さま、お兄さま、お兄さま、お兄さま。……モウ一度……今のお声を……聞かしてエーッ……」という悲痛な少女の声。何が何やらわからない。

そこに現れる九州帝国大学法医学教授、医学部長、若林鏡太郎。若林は、〈私〉が九州帝国大学精神科の第七号室に収容されており、精神病科教室主任教授の正木敬之の下、精神病の治療を行っていること、しかし、正木博士は一か月前に自殺したので、その後の仕事を自分が引き受けることになったことなどを説明した。また、隣室の少女は〈私〉の従妹であり許嫁であると言う。若林の話によれば〈私〉はある「空前絶後の怪事件」に関わっており、その怪事件を解決するに

は〈私〉の過去の記憶の回復が必要であるという。若林は〈私〉の記憶を回復させるため、かつて正木博士がいた教授室へと案内する。そこで〈私〉は「ドグラ・マグラ」を目にするのであった。〈私〉は少し興味をひかれたが、若林の説明に頭が混乱しそうになったので切り上げる。そして、若林の指示通り正木が遺した遺稿を読み始める。

その遺稿とは以下のようなものである。現代の精神病患者への虐待を救済すべく阿呆陀羅經で書かれた『キチガイ地獄外道祭文』、『地球表面上は狂人の一大解放治療場』、『絶対探偵小説 脳髄は物を考えるところに非ず』という新聞記者との談話記事。胎児は、母胎にいる十か月の間に夢を見ているという学術論文『胎児の夢』。正木の遺言書であり、「狂人解放治療場」や、夢中遊行により自分の母と妻を殺した呉一郎の殺人や、呉家にまつわる因縁の概要が盛り込まれた『空前絶後の遺言書』。

〈私〉が正木の遺言書まで読み終わり、ふと顔を上げるとそこには一か月前に死んだはずの正木敬之がいた。

突如現れた正木により語られる、呉一郎が起こした夢中遊行による殺人事件の真相。事件の裏での怪博士、MとWの騙し合い。〈私〉は再び七号室に戻り、物語は

夢と現実の混乱の中「……ブウウウ——ン——ン——ン……」という時計の音と共に幕を閉じる。

### ○研究

#### 一、〈私〉が目覚めたのはいつか

まず「〈私〉とは何者か」という問題の前に「〈私〉が目覚めたのはいつか」を考えたい。

〈私〉は目覚めてから九州帝国大学法医学教授医学部長若林鏡太郎と対面した時「今日は大正十五年の十一月二十日ですから……」（『ドグラ・マグラ』角川文庫、昭和五十一年（以下全て同）上132頁）と告げられる。それは大正十五年十月十九日に呉一郎が起こした夢中遊行事件の約一か月後である。しかし、〈私〉が遺稿を読み終えた後に突如現れた正木敬之は〈私〉に、「いいかい。改めて言うておくが、今日は大正十五年の十月二十日だよ。いいかい。もう一度、繰り返し言うておく。今日は大正十五年の十月二十日……（略）」（下150頁）と言う。すなわち、呉一郎の夢中遊行事件の翌日に目覚めたことになる。ここで、主人公も読者も混乱させられる。いったいどちらが正しいのか。

先に結論を述べれば、〈私〉が目覚めたのは大正十五年十一月二十日だと考えられる。なぜ、そう思うのか。根拠を四つの項目にして説明する。

#### ①モヨ子の叫び

#### ②散髪をする小男の台詞

#### ③季節

#### ④書類に積もるホコリ

#### ①モヨ子の叫び

〈私〉が目覚めた時、隣の部屋から壁を叩く音と悲痛な少女の叫びが聞こえてくる。彼女の名前は呉モヨ子という。呉一郎の従妹で、許嫁である。一郎との結婚式の前夜、一郎に殺されたことになっているが、実は若林の手により蘇生している。彼女は隣室から〈私〉に次のように叫んでいる。

「……あたしの苦しみが、おわかりにならないのですか……毎日毎日……毎夜毎夜、こうしてお呼びしている声が、お兄様の耳に入らないのですか……ああ……お兄様、お兄様、お兄様、お兄様……あんまりです、あんまりです、あんまりです……あ……あ……あ……あたしは……声がもう……」

（上12頁）（傍線は引用者による）

ここからわかるのは、彼女は「毎日毎日……毎夜毎夜」叫び続けていることである。では彼女はいつから叫び続けているのか。大正十五年十月十九日の午後九時以降に彼女は若林により六号室に収容されている。

そこから毎日叫び続けているのであれば、少なくとも十月二十日より数日は経っていなければならぬので、〈私〉が目覚めた日が大正十五年十月二十日だとは考えにくい。

## ② 散髪をする小男の台詞

〈私〉は若林と対面して、現在、九州帝国大学の精神病科の七号室にいることや、〈私〉の名前を思い出させる」ことが若林の目的であるということを知られる。そして、名前を思い出させる実験が始まるのである。その最初が散髪であった。散髪をする前に、担当の小男が若林に「この前の通りの刈り方で、およろしいので……」（上52頁）と言った時、若林は「ハッ」とする。また、小男は言う。「へい。ちょうど丸一か月前のことで、特別の御注文でしたから、まだよく存じております。まん中を高く致しまして、お顔全体が溫柔おとなしい卵型に見えますように……まわりはごく短く、東京の学生さん風に……」（上52頁）（傍線は引用者）。このことから、〈私〉は一か月前も同じように散髪されたことになる。散髪前の〈私〉の風貌は「……鼻が尖とんがって、目が落ち窪くぼんで頭髪が蓬々ほうほうと乱れて、顎鬚あごひげがモジャモジャと延びて」（上6頁）いる。では、一か月前の彼はどんな姿だったのか。

〈私〉は正木が現れた後、正木による記憶の回復実験の手始めとして、正木と共に教授室の窓から狂人の解放治療場を見る。そこには、十人の狂人がいて、その中に畑仕事をしている老人を微笑みながら見ている呉一郎の姿があった。正木によればこの現象は「離魂病」といい、〈私〉は十月十九日の体験を夢に見ているという。その一郎の姿は「……髪毛を蓬々とさした……色の白い……頬べたの赤い……着物をダラしく纏うた青年の姿」（下166頁）であった。

呉一郎＝〈私〉とはここではまだ断定できないが、〈私〉が正木の教授室からみた呉一郎の姿を、一か月前の〈私〉の姿と仮定するならば、散髪屋は十月二十日にもこの蓬々とした髪を切り、〈私〉はその一か月後に髪を切ることになる。

## ③ 季節

〈私〉は散髪を終えた後、六時四分に看護婦に連れられ、浴室に向かう。その途中に〈私〉は、秋の植物である豆菊やコスモス、鶏頭が咲き乱れている砂地を見、新鮮な冷たい空気を吸って「……ああ……今は秋だな」（上57頁）と感じている。

物語終盤で、

（……）……きょうは、大正十五年の十一月二十日、

と言った若林博士の言葉までも嘘だとすれば、私  
はもつともつと前から……ホントウの「大正十五  
年の十月二十日」以来、何度も何度も数限りなく、  
同じ夢遊状態を繰り返させられていることになる  
のではないか……

(下371頁)

と〈私〉は考えているが、彼が最初に見て、感じた景  
色はまぎれもなく秋の景色なので、〈私〉が目覚めたの  
は、夏でも冬でもなく、秋に目覚めた事がわかる。

#### ④書類に積もるホコリ

〈私〉が自分の過去を探るために若林に連れて来ら  
れた、正木の教授室は次のように述べられている。ホ  
コリに関する部分を傍線で引いた。

部屋の中央から南北に区切った西側は、普通の  
板張り<sup>びた</sup>で、標本らしいものが一パイにならんだガ  
ラス戸棚<sup>とびだ</sup>の行列が立塞<sup>とびだ</sup>がっているが、反対に東側  
の半分の床は、薄いホコリを冠<sup>かぶ</sup>った一面のリノリ  
ウム張りになっていて、その中央に幅四、五尺、  
長さ二間ぐらいい見える大卓子<sup>だいテリム</sup>が、中ほどを二つ  
の肘掛<sup>ひじかけ</sup>回転椅子に挟まれながら横たわっている。  
その大卓子の表面に張詰<sup>かぶ</sup>めてある緑色の羅紗<sup>ろさ</sup>は、  
やはり薄いホコリを被<sup>かぶ</sup>ったまま、南側の窓からさ

し込む光線を眩しく反射して、この部屋の厳肅味  
を、一層高潮させているかのようである。また、  
その緑色の反射の中央にカンバス張りの厚紙に挟  
まれた数冊の綴<sup>とじ</sup>込みらしいものと、青い、四角い  
メリンスの風呂敷包<sup>もつた</sup>み<sup>み</sup>が、勿体<sup>もった</sup>らしくキチンと置  
き並べてあるが、その上から卓子の表面と同様の  
灰色のホコリが一面に蔽<sup>おほ</sup>い被<sup>か</sup>さっているのを見る  
と、何でもよほど以前から誰も手を触れないまま  
置き放しにしてあるものらしい。しかもその前  
には瀬戸物の赤い達磨<sup>だま</sup>の灰落<sup>は</sup>しが一個、やはり灰色  
のホコリを被<sup>か</sup>つたまま置き放しにしてあるが、そ  
れが、その書類に背中を向けながら、毛だらけの  
腕を頭の上に組んで、大きな口を開きながら、永  
遠の欠伸<sup>あくび</sup>を続けているのが、何だか故意<sup>わざ</sup>とそうし  
た位置に置いてあるかのように、妙に私の気にか  
かるのであった。(上84頁)

また、物語終盤でも同じようなホコリの描写がある。  
それを次に引用する。

(…)カンバス張りの厚紙に挟まった「狂人の暗  
黒時代」のチョンガレ歌や「胎児の夢」の論文な  
ぞいう書類の綴<sup>とじ</sup>込みだけは、よく見ると確かに誰  
かが、ツイこの頃手を触れているらしく、少し横  
すじかいのX形に重なり合ったまま、投げ出され

ているようであるが、もう一つの方の、今日の午前中に正木博士が私の眼の前で塵を払ったに相違ない、青いメリンスの風呂敷包みの上には、やはり初めて見た時の通りに、灰色の細かい埃が一面に被さっていて、久しく人間の手が触れていないことを証拠立てている。(中略) ヒクヒクと戦く指でメリンスの風呂敷包みをつかんで引寄せると、あとに四角い埃のアトカタがクツキリと残った。その結び目に落込んでいる埃の縞を今一度よく見たが、どう考えても最近に人の手が触れた形跡はない。そうして、その結び目を解いている中に、白い埃の縞は跡型もなく消え飛んでしまったのであった。(中略) メリンスの目から洩れ込んだ細かい埃は、調査書類の原本の表紙になっている黒いボール紙の上にもウツスリと被さっていて、絵巻物の新聞包みを取除けると、またも長方形のアトカタがクツキリと残った。

(下 353 頁～355 頁)

このホコリの積もり具合から、正木の死後、この教室は長い間誰にも使用されていないことがわかる。したがって、大正十五年十月二十日まで使用されていた部屋に急にホコリが積もることはありえないので、〈私〉が大正十五年十月二十日に目覚めるといふこと

は考えられない。

以上四つの根拠を示したが、この日付については二つの辻褃の合わない問題がある。それが、作中の『ドグラ・マグラ』との対面と、正木敬之の出現である。

前者の作中の『ドグラ・マグラ』との対面について、若林は〈私〉の過去を思い出す実験として、〈私〉を正木の教室に連れていく。そこには「私の頭も、これくらいに治癒りましたから、どうぞ退院させて下さい」(上85頁)と主任教授に提出された「精神病研究用の参考品」が並んでいる。そこで〈私〉は『ドグラ・マグラ』と出会うのである。

この作中の『ドグラ・マグラ』の出現は読者を戸惑わせるだろう。今、自分が読んでいる本も「ドグラ・マグラ」であり、その中に再び『ドグラ・マグラ』が現れるのだから。

『ドグラ・マグラ』のページ目をめくると、

#### 巻頭歌

胎児よ胎児よ何故躍る 母親の

心がわかっておそろしいのか(上87頁)と書かれており、「その次のページには黒インキのゴシック体で『ドグラ・マグラ』と標題が書いてあるが、作者の名前はない」(上87頁)。若林の説明によると、この作品は正木が亡くなってすぐに、付属病室に

収容されている一人の若い大学生の患者が、一気に書き上げ、若林に提出したものであるという。その大学生とは、尋常一年生から高等学校を卒業して、九大に入学するまで秀才だったのだが、探偵小説好きが高じて、「将来の探偵小説は心理学と精神分析と精神科学方面にあり」（上90頁）と信じた結果、精神に異常をきたし、ある惨劇を起こし収容されることになったという。

『ドグラ・マグラ』の内容は次のようなものである。

……『精神病院はこの世の活地獄』という事実を痛切に喰いあらわした阿呆陀羅經の文句……

……『世界の人間は一人残らず精神病者』という事実を立証する精神科学者の談話筆記……

……胎児を主人公とする万有進化の大悪夢に關する學術論文……

……『脳髓は一種の電話交換局に過ぎない』と喝破した精神病患者の演説記録

……冗談半分に書いたような遺言書……  
……唐時代の名工が描いた死美人の腐敗画像

……

……その腐敗美人の生前に生写しともいうべき現代の美少女に恋い慕われた一人の美青年が、無意識のうちに犯した残虐、不倫、見るに堪えない傷害、殺人事件の調査書類……（上94頁）

この内容はこのあと〈私〉が読む正木の遺稿の内容と合致しており、また、突如出現する正木により語られる事柄も含まれている。若林は〈私〉に正木の遺稿の内容を大まかに説明するのであるが、不思議なことに〈私〉は『ドグラ・マグラ』と正木の遺稿が似ていることに気づかずに、『キチガイ地獄外道祭文』のページを開くのである。

この作中の『ドグラ・マグラ』はどう捉えるべきであろうか。田中雅史氏はこの作中の『ドグラ・マグラ』について「体験と認識—夢野久作『ドグラ・マグラ』の構成について」の中で次のように述べている。

（…）このようなことが現実にかかることはまづあり得ない。また、原稿の『ドグラ・マグラ』と正木博士の研究が対応しているのに、ポカン君<sup>(3)</sup>がそのことに気づかずにいるのも変である。

これは夢の中で体験するような状況といえる。夢の中では気がかりなことがあると、それが形を変えて繰り返し現れるということが起こりうる。そして、目が覚めている時なら奇妙に感じることでも、平気で受け入れるということもありがちである。この点は、作中の「胎児の夢」という論文でも触れられている。

田中氏は作中の『ドグラ・マグラ』を辻褄の合わない

いことから「夢で体験するような状況」と述べている。しかし、『ドグラ・マグラ』が書き上げられたのは、正木が亡くなってからである。正木が亡くなったのは十月二十日であり、正木の死体が発見されたのは同日午後五時である。〈私〉が目覚めたのが大正十五年十一月二十日であれば、〈私〉は大正十五年十月二十日以降に書き上げられた『ドグラ・マグラ』を目撃していると考えられることもできる。

後者の正木博士の出現について、〈私〉が『キチガイ地獄外道祭文』から『空前絶後の遺言書』まで読み終わり、顔を上げると、そこには一か月前に死んだはずの正木敬之がいた。正木は〈私〉に今日は「大正十五年の十月二十日」だと告げる。そして、〈私〉が目覚めてから教授室に来るまでの一部始終を把握していたと言う。しかし、〈私〉はそれを信じることができない。そこで、正木は次のように〈私〉に説明する。

「(…)…それから、ついでに吾輩の頭の上の電気時計を見たまえ。今は十時十三分だろう。ウン。吾輩のとピッタリ合っている。つまり吾輩が今朝になって、その遺言書を書きさしたまま、居睡りを始めてから、まだ五時間しか経過していない理屈になるんだ。……こうした事実と、その遺言書のおしまいのところのインキがまだ青々としてい

る事実とを総合したら、吾輩がこうしてケロリとしていたって別に不思議がることはなからうじやないか。(後略)」(下151頁)

また、正木が〈私〉に責められ退出する前に、お茶を持って入ってきた老小使いの台詞も妙である。

「……へへ……へいへい。ちつと遅うなりまして……へい……。昨夜からほかの小使がみんな休みまして、今朝から私一人でございますもんじゃけん。へい。まことに……」

(中略)

「……へエイ……さようございましたか。それならば安堵致しました。はじめてあのようなお顔をばお見上げ申しましたもんじゃけん……へいへいどうぞごゆるりと、なさいませえ。私一人でもまことに行き届きまつせんで……へい。(中略)……それに昨日からはまた、あの解放治療場で大層もない御心配ごとができて、そのために今一人しかおりませぬ小使が、足を踏み挫きまして休んでおりますようなことで……先生様もお気の毒でございます……へいへい……へい……どうぞごゆるりと……」(下323頁～325頁)

正木博士や老小使いのこの言葉からは今日が十月二十日ではないかと思えてしまう。



しかし、この正木敬之の出現について〈私〉は物語終盤で次のような結論に達している。

……不思議ではない。

……チットモ不思議ではない

……私は今朝から二重の幻覚に陥っていたのだ。正木博士のいわゆる離魂病にかかっていたのだ。

……私は今から一か月前の十月二十日にも、やはり、きょうとソックリの夢遊を行ったに違いないのであった。

……その一か月前の十月二十日の早朝の、やはりまだ真つ暗いうちのこと……私はかの七号室のタタキの上に、今朝の通りの姿で寝ていて、今朝の通りの状態で眼を見開いたのであった。

(略)

……それから遺言書を読み終った私は間もなく、その遺言書を書いた当の本人の正木博士に会って、きょうの通りに肝を潰した。

(略)

……そうした出来事を一か月後の今日になって、私はまた、その通りの暗示の下に、寸分違わず正確に繰り返しつつ夢遊して来たに過ぎないのだ。(略)……いずれにしても今日の午前中、私がいろんな書類を夢中になって読んでいるうちに、若

林博士がコソソリ立ち去った後にはこの室の中に誰もいなかったのだ。正木博士も、禿頭の小使も、カステラも、お茶も、絵巻物も、調査書類も、葉巻の煙も何もかも、みんな私の一か月前の記憶の再現に過ぎないのだ。たった一人で夢遊中の夢遊を繰り返していたに過ぎなかったのだ。(下368頁～371頁)

では、彼はいつから夢中遊行を始めたのか。それは『キチガイ地獄外道祭文』のページをめくり、「脳髓は物を考えるところに非ず」や「胎児の夢」などの論文を読んでいる途中からではないかと考えられる。前述の根拠④で、大卓子の書類については「確かに誰かが、ツイこの頃触れている」(下353頁)らしい痕跡があるからである。

つまり〈私〉は大正十五年十一月二十日の中で、大正十五年十月二十日の出来事を夢として体験したといえる。

以上より、〈私〉が目覚めたのは大正十五年十一月二十日であり、『ドグラ・マグラ』との対面は、大正十五年十月二十日以降に書き上げられたものを目撃したと考え、正木敬之の出現は大正十五年十月二十日の出来事を夢中遊行していると考えられる。

## 二、作中の二つの理論

〈私〉とは何者かを明らかにするために、迂回路を辿ることになるが、「脳髄は物を考えるところに非ず」と「胎児の夢」という二つの理論をおさえておく必要がある。なぜ、ここで二つの理論を提示するのか。それは、これらの理論が〈私〉の正体を掴むための鍵となつていて考えるからである。

### ◎「脳髄は物を考えるところに非ず」

これは、大正十三年三月二十五日に、正木が預けていた銀時計を受け取るついでに提出した「脳髄論」の内容を談話記事として載せたものである。正木の説明を代弁するかのよう、アンポンタン・ポカン君の演説が入り、ポカン君の演説の中にも正木が登場している。

「脳髄論」とは簡単に言えば、脳髄は物を考えるところではないということである。では、私たちが意識している、欲望、感情、意志、記憶、判断、信念等はどこで感じているのか。それらは、私たちの全身三十兆の細胞の一つ一つの中に平等に籠っているというのである。そして、その全身の細胞の意識の内容を、全身の細胞へ洩れなく反射交感する、仲介の機能だけを担っている細胞の一团が、脳髄なのである。例えるな

ら、電話交換局みたいなものである。また、その人間の細胞に含まれている、その人間の個性や特徴は、その人間の先祖代々から遺伝してきた心理作用の集積であると正木は説明する。

しかし、正木は次のように言う。

「脳髄が物を考える」という従来の考え方を、脳髄の中で突き詰めて来ると「脳髄は物を考えるところに非ず」という結論が生まれてくる……という事実はモウわかたつたとして、その「考えるところに非ず」をモウ一つタタキ上げて行くと、トドの詰まりがまたもや最初の「物を考えるところ」に逆戻りして来るといふ奇々妙々、怪々不可思議を極めた吾輩独特の精神科学式ドウドウメグリの原則までおわかりになるといふ……（上232頁）

だから、ポカン君は自分の頭から「考える脳髄」を引っ張り出しては、それを踏みつけるとひっくりかえってしまうのである。

### ◎「胎児の夢」

これは、正木敬之が卒業論文で書いたものである。胎児は母親の胎内にいる十か月の間、夢を見ているという。その夢は、元始動物から人間になるまでの艱難辛苦を共にした、「万有進化の状況」を辿り、先祖の

記憶までも出現させる。なぜ、胎児はすぐに人間の形のまま、生まれてこないのか。人間の胎児はなぜ最も長い胎生時間を要するのか。胎児は艱難辛苦の歴史を繰り返すが、それは、何者が記憶しているのか。これらの疑問の先には「何が胎児をそうさせたのか」という問題がある。それは「細胞の記憶」がそうさせたのである。胎児の夢は悪夢でなければならず、胎児を創造するものは「胎児の夢」であり、「胎児の夢」を支配するのは「細胞の記憶」なのである。

### 三、〈私〉とは何者か

以上、〈私〉とは何者かを明らかにする前に、正木が唱える二つの学説を提示した。この二つの学説は〈私〉の正体を明らかにするための鍵ともいえるだろう。これらの学説がどのように関わってくるかは後述する。

さて、ここから本題の〈私〉とは何者かについて考察する。

若林と正木は〈私〉の過去の記憶を回復させるため、様々な暗示を与える。その中で〈私〉と同一のような人物が三名登場する。それが次である。

- ・ 呉一郎
- ・ アンポンタン・ポカン君
- ・ 『ドグラ・マグラ』の作者

〈私〉を含めそれぞれの特徴を資料で表にまとめた。

この表を見ると、「呉一郎」「アンポンタン・ポカン君」「ドグラ・マグラ」の作者」は二十歳程度であることや九州帝国大学の精神病室に収容されていること等、性格や出来事が非常に似ていることがわかる。さらには、彼らと〈私〉にも共通の点がいくつも見られる。この四人は皆同一人物と見ていいのだろうか。単純にそうは考えられない。なぜならば、「呉一郎」は「呉一郎」であり、「アンポンタン・ポカン君」は自身を「アンポンタン・ポカン君」としか思っていないからである。「アンポンタン・ポカン君」は自分のことを「呉一郎」だとは思っていないし、『ドグラ・マグラ』の作者」も自分自身が「アンポンタン・ポカン君」だとは思っていない。同様に、〈私〉も目覚めた時は、自分が誰なのか混乱したが、「おれはおれに間違いないじゃないか(上20頁)」と考えている。物語終盤では、自身を呉一郎とし、父親は正木敬之、母親は呉千世子という結論に達し、

「アアッ……お父さアーン……お母さアーン……」  
(下373頁)

と叫ぶが、〈私〉自身の耳には届かない。〈私〉はやはり〈私〉でしかないのだ。

彼らは非常によく似ているが、彼らはそれぞれの人

格を持っていて、簡単にイコールで結ぶことができない。では、この四名を「脳髓は物を考えるところに非ず」の内容に当てはめて考えることはできないだろうか。

それは「呉一郎」が脳髓の役割を担い、残りの三人が「細胞の一粒一粒」という考え方である。脳髓の呉一郎は、大正十五年四月二十六日に絵巻物の暗示で遺伝発作を起こし、人事不省に陥り、「自我忘失症」にかかってしまった。すなわち、脳髓の反射交感機能に異常が起こったのである。「脳髓は物を考えるところに非ず」のポカン君の演説内の「脳髓局、ポカン式反射交換事務、加入規約」の第三条には次のようなものがある。

◇第三条 脳髓局ノ反射交感機能ニ故障ヲ生ジタル場合、ソノ故障ヲ生ジタル一カ所ニオイテ反射交感サレツツアリシアル意識ハ、他ノ意識トノ連絡ヲ絶チ、全身ノ細胞各個ガ元始以来保有セル反射交感作用ヲ直接ニ元始下等動物ト同様ノ状態ニオイテ(脳髓ノ反射交感作用ト無関係ニ)使用シ、他ノ意識ニ先ンジテ感覺シ、判断シ、考慮シマタハ全身ヲ支配シテ運動活躍セシムルヲ得ベシ。(上219頁〜220頁)

もう少しわかりやすくいうと次の通りである。  
「脳髓の反射交感機能に異常が起こった場合には、

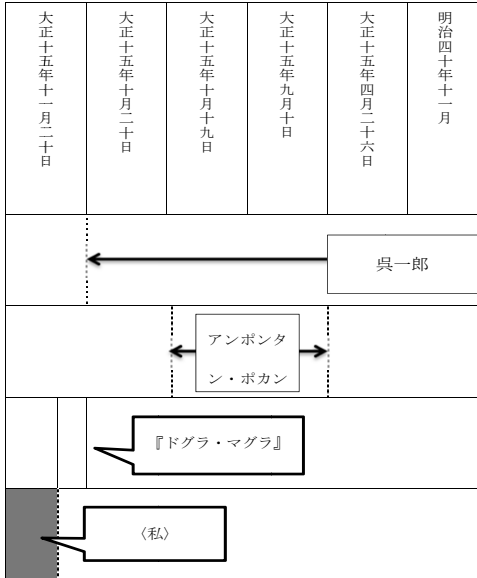
脳髓のない下等動物と同様に脳髓以外の全身の細胞の反射交感作用を脳髓の代わりに活躍させよ」

(上219頁)

したがって、脳髓である呉一郎の反射機能が故障したため、細胞である三人が脳髓の代わりに反射交感作用を活躍させ始めたとも考えられる。

四人が登場する時期を次に図で示した。

呉一郎は大正十五年四月二十六日に絵巻物を見せられ「自我忘失症」にかかり、後に、彼は解放治療場で呉青秀として活動する。呉一郎が「自我忘失症」にかかっている間、大正十五年九月十日から十月十九日まで「アンボンタン・ポカン君」という人物が登場する。彼は正木博士曰く、「過去の記憶から完全に切離されているので、現在の出来事に対する記憶作用は何ものにも邪魔されない絶対自由世界に浮いて遊んでいる。」(上229頁)そのため、彼は自分が何者かわからないため「脳髓」をどこまでも追求し、「脳髓は物を考えるところに非ず」という結論に達するも、「物を考える脳髓」を踏みつけ、引っくり返ることを繰り返す。しかもその論理は正木が講義する「脳髓論」そのものである。その後、大正十五年十月十九日に解放治療場で呉一郎による殺傷事件が起き、正木博士が自殺した後、「ドグラ・マグラ」の作者」は十月二十日に語られた呉一



郎の事件の真相を書き残すべく、一週間不眠不休で『ドグラ・マグラ』を書き上げた。そして、大正十五年十一月二十日に〈私〉が目覚めるのである。〈私〉も「アンボンタン・ポカン君」や『ドグラ・マグラ』の作者「同様」「過去の記憶から完全に切離され」「何ものにも邪魔されない絶対の自由世界に浮いて」いる。それは「いつの間にか小さく小さく縮こまって来て、無限の空虚の中を、当てもなくさまよいまわる微生物アドムのように」。

(上53頁)

「アンボンタン・ポカン君」と『ドグラ・マグラ』の作者」の共通している行動は何かの記憶を再現しているところである。「アンボンタン・ポカン君」は正木博士の講義を、『ドグラ・マグラ』の作者」は呉一郎が体験した十月二十日の出来事を。彼らの存在意義はこのように記憶の再現にあるのではないだろうか。では、〈私〉はどうであろうか。〈私〉の存在意義について関連のありそうな文章を引用する。

(…)……………これが胎児の夢なのだ……………

……………と私は眼を一パイに見開いたまま寝台の上に仰臥して考えた。

……………何もかもが胎児の夢なんだ……………あの少女の叫び声も……………この暗い天井も……………あの窓の日の光も……………

……………否々……………今日中の出来事はみんなそうなんだ……………

……………おれはまだ母親の胎内にいるのだ。こんな恐ろしい「胎児の夢」を見てもがき苦しんでいるのだ……………

……………そうしてこれから生まれ出ると同時に大勢の人を片ツ端から呪い殺そうとしているのだ……………

……………しかしまだ誰も、そんなことは知らないのだ……………ただおれのモノスゴイ胎動を、母親が感じて……………

いるだけなのだ。(下374頁〜375頁)

《私》は目覚めてからの出来事を「胎児の夢」とした。その胎児の夢とは呉一郎が体験した大正十五年十月二十日の出来事そのものである。《私》が「細胞の一粒」であるならば、《私》は正木が死んだ一か月後の大正十五年十一月二十日の出来事も寸分もらず記憶しているのではないだろうか。すると、《私》の存在意義とは「アンポンタン・ポカン君」や「ドグラ・マグラ」の作者と同様、呉一郎が体験した大正十五年十一月二十日の記憶を自身に刻み付け、それを再現することではなからうか。

#### 四、まとめ

夢野久作により二十年の月日をかけて完成されたこの物語は幾重にも囲まれた入れ子型構造であり、さらには時間がつれ合っている。その構造は、若林鏡太郎が作中で述べるように「徹頭徹尾、人を迷わすように仕組まれている」(上92頁)としか考えられない程複雑であり、いくつかの謎を孕んでいる。

本稿では主人公《私》の正体を突き止めるべく、まず、《私》が目覚めたのはいつかを明らかにした。ここから、この物語は、ある時間の中にまた別の時間が含まれていることがわかった。それから、本題の「《私》

とは何者か」については、作中の二つの理論「脳髄は物を考えるところに非ず」「胎児の夢」に着目し、《私》とは、呉一郎が絵巻物の暗示によって脳髄に異常をきたした結果遊離した「細胞の一粒」であると結論付けた。加えて、主人公《私》の存在意義は、大正十五年十月二十日の呉一郎が体験した出来事を再現し、正木敬之が亡くなって一か月後の記憶を刻むためだと考察した。《私》が大正十五年十一月二十日の記憶を刻み出した「呉一郎」かもしれないし、あるいはまた別の《私》かもしれない。

#### ○注釈

1、石川一郎「わかれ」(西村和海編『夢野久作の世界』所収(平河出版社、昭和五十年)118頁)

2、これまでの「ドグラ・マグラ」論での主人公についての見解をいくつか挙げる。

(主人公Ⅱ 呉一郎)

水澤周おとこ氏は「夢野久作の一断面」の中で、「ドグラ・マグラ」は「家父長の怨念小説」とし、次のように述べている。

「ドグラ・マグラ」の子供は全く受け身のデク人形であり、むしろその人形ぶりによって、父親のエゴイ

ズムをいっそうきわ立たせる役を演じている。

田中雅史氏は「体験と認識…夢野久作『ドグラ・マグラ』の構成について」で、「ドグラ・マグラ」の構成から読者に要請する「解説」への方向付けに着目し、「主人公」呉一郎」と結論付けている。

(主人公＝第三者)

須永誠一氏の「脳髓の地獄—「ドグラ・マグラ」論」においての論が次である。

もつと冷静になって考えてみよう！ 作中の主人公は果たして本当に狂人だったのだろうか？ 誰かの計画によつて、狂人に仕立て上げられ、犯人とされているのかも知れないのだ。夢野久作のこの作品のネライの一はこの何ともしようのない「社会」＝「犯人」説を描きたかったと断言してもよさそうである。

3、ポカン君とは主人公のこと。田中氏は便宜上主人公をポカン君と呼んでいる。

○参考文献

西村和海編『夢野久作の世界』(平河出版社、昭和五十年)

○参考論文

・鶴見俊輔「ドグラ・マグラの世界」

(西村和海編『夢野久作の世界』所収 平河出版社、昭和

五十年139頁—148頁)

・水澤周「夢野久作の一断面」

(西村和海編『夢野久作の世界』所収 平河出版社、昭和五十年165頁—170頁)

・須永誠一「脳髓の地獄—ドグラ・マグラ」論」

(西村和海編『夢野久作の世界』所収 平河出版社、昭和五十年201頁—204頁)

・松田修「循環的腐卵世界の構造」

(西村和海編『夢野久作の世界』所収 平河出版社、昭和五十年416頁—426頁)

・田中雅史「体験と認識…夢野久作『ドグラ・マグラ』の構成について」

(『言語文化研究』(徳島大学、平成十五年) 87頁—108頁)

○底本

論文中の引用は、夢野久作『ドグラ・マグラ』(上・下)(角川文庫、昭和五十一年)による。

— あんべ・みゆき 日本文学科四年生 —

資料「呉一郎」『アンボンタン・ボカン君』『ドグラ・マグラの作者』(志)の特徴

<p>呉一郎</p>	<p>アンボンタン・ボカン君</p>	<p>『ドグラ・マグラ』の作者</p>	<p>(志)</p>
<p>二十歳。美少年。</p>	<p>二十歳程の美青年。</p>	<p>若い大学生。</p>	<p>二十歳くらい。</p>
<p>探偵小説を好む。</p>	<p>「青年名探偵兼古今未曾有式超特急の脳髄学大博士」(上186頁)</p>	<p>非常に探偵小説好き。</p>	
<p>精神病に興味がある。</p>	<p>「脳髄は物を考えるところに非ず」を演説</p>	<p>「探偵小説は心理学と精神分析と精神科学方面にあり」(上50頁)</p>	
<p>精神に異常をきたし、自分の母と婚約者を殺害</p>	<p>非常に危険な遺伝的精神病の発作にかかる。</p>	<p>精神に異常をきたし、自分自身で、ある幻覚錯覚に囚われた一つの惨劇を引き起こす。</p>	<p>現在、九州帝国大学精神病科教室、七号室に収容されている。</p>
<p>九州帝国大学精神病科教室七号室に収容される。</p>	<p>九州帝国大学に入学すると聞もなく、精神病の七号室に収容される。</p>	<p>精神病室に収容される。</p>	
<p>成績優秀。</p>	<p>優秀。</p>	<p>尋常一年生から高等学校を卒業して、九州帝国大学に入学するまで、ずっと首席</p>	
<p>大正十五年四月二十六日以降「自我忘失症」にかかる。</p>	<p>自分の生まれ故郷や両親の名前、自分自身の名前も忘れていて。</p>		<p>自我忘失症。</p>
<p>母、呉千世子。 父、正木敬之。 伯母、呉八代子。 従妹であり許嫁、呉モヨ子。</p>			<p>六号室の少女は従妹で許嫁。 大正十五年四月二十六日に結婚式を挙げることになっていた。</p>
<p>解放治療場にて、一千年前の先祖である呉晋秀の行動を繰り返す。</p>			
<p>解放治療場にて五名を殺傷。病室にて、壁に頭を打ち付け、絶息するが一命を取り留める。</p>	<p>自分の頭から眼に見えない何かを引っ張り出しては床の上に叩きつける真似をする。演説をし、その後、その何かを踏みつけてひっくり返る。その後、その約三、四十時間眠りつづけ、起き上がった。また、同じ行動を繰り返す。</p>		
		<p>正木と若林、自分自身をモデルにした『ドグラ・マグラ』を書き上げる。</p>	<p>正木との対話で頭痛を感じる。</p>
		<p>正木と若林、自分自身をモデルにした『ドグラ・マグラ』を書き上げた後は、一日中眠る。</p>	